

スペイン風邪に学ぶ ～100年前の教訓～

今からちょうど100年前、1918年から3年間にわたり世界中で猛威を振るった流行性感冒肺炎（インフルエンザ）は、元々アメリカの米軍キャンプで発生し、欧州へ派遣された兵士を介して世界へ広まったとされている。当時は第一次大戦中であり、どの国も戦局への影響を考えて情報統制を行い自国の感染拡大を隠していた。実際、世界中で戦死者より多くの軍人がこのインフルエンザで亡くなっているのであるが（アメリカ軍だけで戦死者5万人に対してインフルエンザは5万7千人）、中立国であったスペインが、自国の感染拡大を報じたことから、この新型インフルエンザに“スペイン風邪”の名前が付くこととなった。

日本における第1波は1918年の春であったが、その影響は記録に残っていないほど小さなものであったらしい。ところがその年の秋に第2波が来て、この名古屋市も含む全国各地の学校や工場の現場で感染が爆発した。このとき20～30歳代の感染者も多く、国内で26万人の死者を出した。さらに翌年1919年の秋口から1920年の冬にかけて第3波が来て18万人の死者をもたらした。死者数は減少しているが、致死率は第2波の1.2%から5.3%と4倍以上となっていた。結局3年間にわたる流行で死者は合計45万人となり、関東大震災による死者数10万5千人を遥かに上回る数となった。世界中では、5億人（当時の世界人口の1/3）が感染し、そのうち亡くなった人は4千万から1億人ともいわれる。（幅があるのはアフリカなどでは100年前の記録がほとんど残っていないからである。）

当時、感染拡大が認められる中であっても、ほとんどの地域で演劇や相撲など催し物の中止もされず、工場も稼働を続けるなど第一次大戦の軍需景気に日本中が沸いている状況であった。確かに第一次大戦の終りに近く、政府は軍を使ってロックダウンを命じることもできたかもしれない。なぜ当時の政府は強制力を持った措置や少なくとも国民への自粛を求めなかったのだろうか。理由はあくまで推測であるが、接触制限（3密回避）が感染拡大を抑えるという科学的根拠が、政府にも国民にも認識されていなかったことだという。さすがに内務省の衛生局は、この3密リスクを認識してはいたが、それを伝えるテレビもラジオもなく新聞が主たるメディアの時代である。予防法の啓発活動を満員の活動写真劇場（映画館）の幕間に行っていたという笑い話にもならない状況だったという。

一方でこのとき日本においても飛沫感染については認知されており、学校での指導や街のポスターなどを使って、マスクやうがいについて強く奨励されていた。しかし、なぜか手洗いについては抜けていたのである。理由は、現代のように気軽に流水と石鹸を使うことができなかった当時の水道事情があるという。

当時、10人の子の母親であった歌人の与謝野晶子は、一人の子が学校で感染したのち、

たちまち家族全員が感染してしまったことについて次のように新聞に寄稿している。

『なぜ、政府はいち早くこの危険を防止するために、大呉服店（現代のデパートなど商業施設）、学校、興行物、大工場、大展覧会など、多くの人間の密集する場所の一時的休業を命じなかったのでしょうか。そのくせ警視庁の衛生係は新聞を介して、成るべくこの際、多人数の集まる場所へは行かぬが良いと警告し、学校医もまた同様のことを子供たちに注意しているのです。社会的施設に統一と徹底との欠けているがために、国民はどんなに多くの避けらるべき禍（わざわい）を避けずにいるかしれません。』

現在の我々にとって、新型コロナウイルス感染症といわゆるインフルエンザとの決定的な違いは、効く薬がない、ワクチンがない、迅速に診断する方法がないということである。つまりウイルスと戦う上で丸腰に近い状況であり、100年前にインフルエンザを相手にした人々と同じ状況といえる。医療関係者にとってもこれほど心細いことはなく、科学は発展していても、未知のウイルスに対して医師や専門家の心境も100年前と同じなのである。そんな中で、懸命に治療に当たり、特効薬やワクチンの開発に挑んでいる人たちがいるが、薬やワクチンが開発が成功しても、病状が重篤や医療従事者から順に使用が始まり、世界中のだれもが安価に提供を受けられるまでには、運が良くても2年を要すると専門家は話す。100年前を知る人は、もはや多くは生きてはいない。夏の甲子園大会やウインブルドンの中止には、“戦後初”という言葉が枕詞になっているが、第2次大戦以前までさかのぼれば、人類が忘れてはならない学ぶべき教訓があったのである。

スペイン風邪に人生感を変えられたという与謝野晶子は次のように言い残している。

『私は今、この生命の不安な流行病の時節に、何よりも人事を尽くして天命を待とうと思えます。人事を尽くすことが人生の目的でなければなりません。私たちはあくまでも生の旗を押し立てながら、この不自然な死に対して自己を衛ることに“聡明”でありたいと思えます。』

私は、この“聡明”の一言に心を打たれた。いま私たちがやれることは何か。それは“冷静にやるべきことをやる”これしかない。少なくともこの半年近く、日本は自粛というお願いレベルの形でオーバーシュートを抑え込むことがなんとかできている。未だ戦いの途上である。気を抜かず、互いを思いやる気持ちを忘れず、冷静にやるべきことをやっていきたい。

文責：愛知県立中村高等学校 校長 渡邊 修 R2.08.07

引用参考資料：NHK BS1 スペシャル ウイルス VS 人類 3

(2020年5月12日放送)